

山田陽一著『響きあう身体 音楽・グルーヴ・憑依』

武藤大祐

音楽を聴くと体が動いてしまうのはなぜか——。「あらゆる音楽の源泉は、人間の身体にある」(6)、つまり演奏することも、聴くことも、踊ることも身体を通してであるという端的な事実から出発し、「人びとを揺さぶり、突き動かす」音楽における「快楽の力」(6)を、民族音楽学や人類学を中心に幅広い文献を渉猟して解き明かそうとする濃密な一書である。

著者はバブアニューギニアなどをフィールドとしつつ、音の響きと身体そして自然の連関をめぐって「音響身体論」(245)を展開する民族音楽学者だが、本書はダンスとの関連が深い。第1章「音楽・経験・身体」、第2章「グルーヴィーな身体」、第3章「踊る身体」、第4章「ライヴな身体」、第5章「響きあう身体」、第6章「憑かれる身体」という構成により、モノとしての音楽ではなく生きられた経験としての音楽に迫っていく。

サルデーニャ島での実地調査に基づく第5章を除くと、先行研究の巧みな交通整理が本書の大部分を占める、ように見える。しかし相当量の文献を手際よく紹介し、連鎖させながら進む独特の論述はまさに「引用の織物」であって、読者は研究史や諸言説の領域横断的な連関を視野に収めつつ、いつのまにか著者の考える音響身体論の枠組へと招き入れられるのである。舞踊研究者にとってとくに興味深いのは、全体の3分の1を占める第2章のグルーヴ論と、それをふまえた第3章だろう。

著者によれば、学術的なグルーヴ研究の嚆矢は、民族音楽学者Charles Keilの論文“Motion and Feeling Through Music”(1966年)である(45)。Keilが提唱したのは、作曲によって構築され、「シタックス的」に理解される「意味」ではなく、演奏において即興的にもたらされ、「プロセス的」に理解される「フィーリング」の研究に他ならない(45)。これを考える上で、Keilはジャズ・ピアニストのポール・ブレイの「グルーヴに入る」、すなわち『正しいやり方』で『正しい軌道』や『正しいパターン』にのること」という発言に着目する(46)。ブレイはグルーヴに入ると、もはや「次のフレーズがいいものになるかどうかなんて考える必要はない」とも言う(46)。いわば音楽自体が生き物のごとく動き出し、演奏者の身体はその流れの一部となってしまう。こうしたグルーヴの現象を仔細に見ると、それは周期的パターンの予期と、微妙な変化の即時的な認知からなっている。しかもそこに何らかの心地良さが伴うのである。

ここから著者は、民族音楽学での議論のみならず、演奏者の言説、さらに心理学、社会学、哲学などでの研究を次々に呼び出しながら、またジェイムズ・ブラウンからガーナの儀礼音楽まで様々な研究に目を配りつつ、グルーヴが身体によって、また複数の身体の関係の中で生じる現象であることを示していく。例えばTiger Roholtのグルーヴ論は、バールの規則性が引き起こす聴覚的な期待が、リズムへの「もたれかかり」や「引き」「押し」などといった身体的な感覚として発現することを指摘している(134)。では、こうした身体的な感覚とダンスはどんな関係にあるのか。

第3章では、とりわけダンス音楽を例に、踊る身体における音楽の経験が様々に論じられるが、とりわけ印象的なのが、踊ることを通してリズムを身体的に「理解」することをめぐる議論である。アフリカ音楽を研究するJohn Miller Chernoffによれば、アフリカでは音楽を習う上で「踊りも習ったほうが良い」とよく言われるという。太鼓と身体運動の対話を経験することにより、音楽の即興的な変化がよりよく聴き取れるようになるからである(145-6)。これに対しBarbara Browningは、サンバのポリリズムにおいて強拍が保留にされ、弱拍がアクセントとなることに注目し、強拍の保留が身体を「飢えた状態」にすると同時に、その飢えを身体の動きが埋めるのだと分析している(154)。どちらの場合も、音楽は踊ることを通して、身体によって「理解」されるのである。

しかし音楽とダンスの間にあるのは、著者が強調するこうした相補性だけではないように思われる。Browningは、踊る身体は「個々のミュージシャンよりも数多くの同時発生的リズムに対応」できるという(157)。またAnne Danielsenは、ファンクミュージックにおいて聴き手／踊り手が「いくつもの方向に同時に引っ張られる」感覚を指摘する(110)。つまり踊り手は楽器演奏から解放されている分、音楽の総体を受け止めながら、諸部分へと分裂しつつ再統合されるのである。それゆえ音楽とダンスは、密接に絡み合いつつも、決して一致しない。そこにこそ両者の「対話」の豊かさがあるというべきではないだろうか。

以上、ダンスと深く関わる部分に絞って論点を拾ってみた。音楽の身体的経験としてのダンスを考えようとする限り、本書はきわめて良質なガイドとなるはずである。

(春秋社、2017年6月刊行)